

## 清川メッキ工業株式会社、株式会社コバート見学記

ATACでは年中行事として優れた製品や製造技術を持つ企業を見学して見聞を広め、日常のコンサルティング活動に役立てていますが、昨年（2009年）12月3、4日に北陸地方の2つの企業を訪問しました。

## 清川メッキ工業株式会社

福井市に本社がある、資本金4,000万円、従業員220名の精密部品の表面処理を得意とする企業です。現社長の清川忠氏が46年前に26歳で創業されました。「2005年第1回ものづくり日本大賞」、「2006年第1回元気なモノ作り中小企業300社」、「日経ものづくり大賞」を受賞した元気な優良企業です。

ニッケル、すずメッキの工程、製品検査工程、研究所の分析室、教育道場、展示室等を見学しました。メッキ職場はクリーンで、一般に3K職場とのイメージを持たれがちな業種ですが、随分きれいだという印象を受けました。

1mmよりも小さい部品や粉末をバレルを使ってメッキしていましたが、微小部品にメッキ電流を流す仕組みには永年にわたるノウハウの積み上げが感じられました。メッキされた部品は半導体、デジカメ、携帯電話、人工衛星等に組み込まれるもので、生産量は600億個/年（2007年ピーク時、その後は経済危機のために減少）という莫大な数ですが、2年半にわたってクレームゼロを継続していると聞き、感心しました。

“自由なる創意の結果が大いなる未来を拓く”という経営理念の下に、“人、物を生き生きさせるメッキ”、“お客さまにとって一番の企業”を掲げ、社員の社会的責任を重視し、地域住民とのコミュニケーションを図って地域に貢献して、お互いにレベルアップしていくことをモットーとしています。

技術的にはナノテクノロジーの表面加工を実現し、付加価値の高い製品を創出してブランド化を図っていく方針で、営業活動はこのブランド化、口コミによる飛び込まれ営業、展示会、ホームページが主体となっています。

住宅地の中に立地していますが、駐車場の住民への開放、学校の理科教育の場の提供等で地域住民との融和を図っています。

人間性に立脚した新技術開発を視野に入れた、さらなる発展が期待される企業だとの印象を強く受けました。



清川メッキ、バレルの変遷の説明

## 株式会社コバート

福井市に隣接する坂井市に本社・工場がある、餡（あん）を包む機械のメーカーです。

115年前に、初代が和菓子の木型彫刻を始められたのが起源ですが、3代目の現小林将男社長が1962年に事業を製菓機械の開発製造に転換し、現在資本金8,500万円、従業員約110名の日本で2社しかない包餡成形機メーカーに育て上げられました。



コバート、試作機で饅頭試作中

手作りを超えた食品を「包む」技術開発に特化し、現在では、5本柱の包餡成形機群（和菓子・洋菓子・コロッケなどの惣菜・あんパンなどのパン・おにぎりなどの米飯）に加え6番目の柱の商品化に取り組んでおられます。この実績が認められて「2008年元気なものづくり中小企業300社」に選定されました。

これら自社開発の包餡成形機は180件を超えた特許でガードし、さらに毎年8件以上の特許出願を続けておられます。このように特許を重視するのは単に技術を権利化するためだけではなく、商品や装置の開発を通じて従業員にやる気を喚起するためでもあります。会議室には「発明は萬代の寶」と大書きされた額が掛っていました。

しかし、社長の特許重視の思いは一企業に留まってはいません。福井県発明協会の会長として「資源のない日本の若者が技術開発立国を目指す」ように、種々の啓蒙活動を続けておられます。

手包を超えた包餡成形機は、その品質と省人操作性で国内はもとより海外にも販路を広げています。しかし海外に知られるほどコピー商品が現れるので、海外で特許権を守ることが今後の課題とのことでした。

一方、さらなる成長を目指して、ニーズの発掘と新たな需要を創造する為に福井市内にアンテナショップを展開し、研究棟も出来上がっていました。一同、この研究棟にも案内され、チョコレートとブルーベリージャムとお餅の三重包餡機の実演を見学し、出来たての三層お菓子を御馳走になりました。

見学後、社長を囲んで質疑の時間が設けられ、お菓子を頂戴しながら、和気あいあい、しかも率直に意見を交わすことができ、印象深いものでした。（株）コバートの益々のご隆昌をお祈りします。

以上見学した2社はいずれもその道の第一人者で、今回も地方にこのような企業が根付いている日本のものづくりの底力を頼もしく思いました。（白石、長田記）